

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「復唱」能力と子どもの音声言語の特徴
Author(s)	武村, 昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 10 : 9 - 19
Issue Date	1980-05-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045111
Right	
Relation	



児童の言語生態合同調査研究・研究報告

音声言語教育の方法的研究(1)

「復唱」能力と子どもものの音声言語の特徴

武村昌於

気分が良ければ、鼻歌が出る。気のふさがっている時は、ことばに張りが無い。改まった時などは、一寸気の利いたことばで話してみたくなる。等々人はその時の気分によって、自分が意識するしないに拘わらず、声の調子や言い回しを変える。これは子どもであつても同じで、例えば、相手を説き

伏せようとする時、子どもは大きな声で言い負かそうとする。論理的に筋道の通つた話でなくとも、大きな声があるのを見る。剣幕に押されて事態が収拾される。つまり、その時その場の自分の「気」をことばに乗せて話し、聞く方もその時の音声によって相手の「気」を推し量つて聞こうとすることの方が子どもにとつて本体のように思われる。

また、子どもに限らず、その人独自の言い回しや口調というものは否定できない。その言い回しや口調を豊かに

備えていて、しかもそれを使いこなしながら話をする人の話は、聞いていて大変面白い。所が、いつもワンパターンの口調でしか話さない人の話は、同じ内容であつても、大変つまらなく感ずる。特に子どもの世界では、面白くしかも人気のある子どもは、様々な言い回しや口調のできる人が多い。

ただ子どもの場合、大人と異なつて音声の資格、変調を意図的、意識的に使いこなすというものは少ない。むしろ少ないから、子どもがそれを意図的意識的に使おうとする時に、子どもの言語発達や精神発達の鍵を示してくれるともいえる。つまり、子どもは自分の意識のアンテナを張つて、他の人のことばや音声を聞こうとする。そこで自分のアンテナにひっかかったことばや音声を捉え、そしてまた、自分のアンテナのしくみやアンテナの張り方も意識するようになる。

これらのことを、特に音声言語の面から実態調査してみたいのであるが、残念乍ら、子どもの音域、アクセント、抑揚などは音声分析器の手を借りなければ明らかにすることができない。そこで今回は、子どもに、聞きつけた音声(音調、語調、音色)をそのまま復唱させることによって、子どもが音声特徴に対してどこまで意識しているかまたは、どう意識しようとしているかを探ることにしたのである。

一、設問文と調査方法

低学年用(一〜三年用)

これから、お兄(姉)さんが、いろいろなことを言いますから、後に続けて、同じことを言つて下さい。1 雨だ、こまっちゃやうな、かさ、持つてきた?
2 どうする? ガラス割っちゃった。
あやまりに行く?

高学年用(四〜六年用)

これから、いろいろなことを言いますから、後に続けて、同じことを

3 どれをお買いになりますか。これなどいかがでしょう。

4 ううん、ちがうよ、ちがうったら、

ぜったいにちがうんだから。

5 ブルドック、クマ、マムシ、シカの

角

6 イルカいるか、いないかいるか、どこにもいるか。

7 日は暮れるし、はらはへるし、とめてくれる所はなさそうだし。

8 報告します。一組全員、異常ありません。ただちにひなん場所に向かつて出発します。

9 おにごっこ、ことり、りす、すぎや

き

10 とうふの角に、頭をぶつけて、死ん

じませ。

言って下さい。

1. 低学年用の3と同じ(↓低3)

2. 低4に同じ

3. 低5に同じ

4. 低6に同じ

5. 低7に同じ

6. 低8に同じ

7. 低9に同じ

8. ある春の日暮れです。唐の都、洛陽

の西の門の下に、ぼんやり空をあお

いでいる一人の若者がありました。

9. 寝ていても、うちの動く。親心

10. カラスは黒い。八郎君も黒い。黒い

からといって、八郎君はカラスでは

ない。

調査実施校

一年生 川崎 稲田小学校 七十五名

二年生 東京 四谷第六小学校 四十名

三年生 藤沢 辻堂小学校 八十名

四年生 八王子 横山第二小学校 四十名

五年生 町田 成瀬台小学校 二十八名

町田 玉川学園小学校 四十一名

六年生 相模原 大野北小学校 十五名

町田 南第四小学校 三十八名

実施期間

昭和五十四年十二月～五十五年一月

調査方法

予め、設問文をカセットテープに録音しておき、それを子ども一人一人に

聞かせ、録音内容と同じことを復唱させる。なお、男子には男子の録音した声を、女子には、女子の録音した声を聞かせた。

二、調査結果と考察

どんなことばであれ、ことばは場面を持つ。例え、それが「あ」という一語であっても、それに音声に伴って口から出る時は、場面を設定して言っており、聞く人も各自が場面を想定して聞いているのである。逆に言えば、場面設定を自由になし得ることは、言語発達が、ひいては精神発達がより以上になされることなのである。

さて、場面を設定するとは、どういうことであろうか。勿論それは、その時の状況を頭の中にイメージとして描くことであるが、むしろ問題にしないてはならないのは、その時に作用する精神の働きである。その精神作用の一つは「構え」である。何故なら、場面を「設定する」とは、自分の感情や思考をどう働かせ、また、どう対処するか、といったように、自分の精神的態度を設定しようとする働きだからである。

この、「構え」る働きは、感情や思考が発達すると同様に、様々に変化し、多様化し、発達していくものであるが、それは、言わば子どもの精神発達そのものとも言えよう。とするなら今回の復唱の調査では、子どもが音声

とことばを聞きつけた時に、子どもがどのように自分の「構え」を設定しようとしたかを見ることによって、子どもの精神発達を探る一つの手がかりを得ることが出来る。要は、場面設定と「構え」の対応のしかたを探るということになる。

ところで、精神作用としての「構え」は、二つの面に大別される。一つは、自他又は彼我関係における人間相互の感情摂取による構えであり(便宜上(相)とする)、もう一つは、自分の感情や気分を変えたり意識したりする構えである(これを(自)とする)。つまり、前者は人間関係の中で自分がどう構えるか、であり、後者は、自分自身の感情や気分をどう変えうるか、である。われわれは、この両面から子どもの場面設定のしかたと、それに対応する構えのしかたを見ようとしたが、以上の他に、設問文の選定に当たって配慮した諸点は次の通りである。

一、ことばの繰り返しや語調によって操作する働きのあるもの(これを(操)とする)
二、イメージや連想刺激によって記憶する働きのあるもの(通)
三、論理によって思考する働きのあるもの(考)
四、物語によって構想を意図する働きのあるもの(構)

以上の考えにより、設問文を再編成してみると、次のように分類される。

(一)自——相の関わりが見られるもの
ア 雨だ、こまっちゃうな、かさ：：
イ どうする? ガラス割っちゃった：
ウ うん、ちがうよ、ちがうたら
：：
：：

(二)自——操
ア 日は暮れるし、はらはへるし：：
イ 報告します。一組全員異常ありません：：
せん：：

(三)相——操
ア どれをお買いになりますか：：
イ 寝ていても、うちの動く、親心

(四)連——操
ア ブルドック、クマ、ママシ、シカの角
イ おにごっこ、ことり、りす、すきやき

(五)操
ア イルカいるか、いないかいるか：
(六)考
ア どうぶの角に、頭をぶつけて：：
イ カラスは黒い。八郎君も黒い：：

(七)構——操
ア ある春の日暮れです。唐の都：：
考察
○ 学年によって異なる傾向についての

先の方類はまた、われわれの視点でもあって、それに従い考察を進めようとするのであるが、各設問による調査結果から、各学年の精神発達の傾向を考察するだけでなく、それと子ども個人の傾向との関連も、併せて考察して

「: : し : し : し : だし」の「し」の音の韻を踏むことと自分の気分の対応がどうか、(二)のイでは、報告しようとする際の独特な語調や漢語と、自分の態度決定との対応がどうか、を見ることとができる。

まず(二)のアでは、表2を見ると、四年生以下(二年のグラフはやや疑問)と五・六年生とは、異なった傾向を見る事ができる。前者は正答が少なく無答が多い。後者は正答がやや多く無答が少ない。つまり前者より後者の方が言いかえが多いということである。この違いは、子どもがことばを聞きつけた時に、自分の場面設定をイメージから復原しようとするか、音調や語調を整えることから、つまり自分の気分が先になって復原しようとするか、によっても生じてくる。即ち、イメージからだと原文をまちがえないようにする意識が働いて、言いかえが少なく、自分の気分が先だと、言いかえが多く原文から離れても平気だということになる。従って、(二)のアの場合のような韻を踏む語調の場合には(この場合に限ってだが)、一般的傾向として、四年生以下ではイメージから先に復原しようとして(自)に意識が留まり易く、五・六年生では自分の気分から先に復原しようとして(操)の方に意識が移り易くなる、という傾向を示している。ところで表(二)のアを見ると、「なきそうだし」を「ないし」と言いかえるのは三年生

に最も多い。「ないし」は、くれるし、へるし、の音調そのままの繰り返しで事実の羅列だとしてしまったものと考えられる。しかし、「なきそうだし」は、「日は暮れる」「腹はへる」の二つの困惑条件から宿泊場所がないことを想像していることで、この意識の屈折を聞き届けられなかったことになる。従って三年生では、韻を踏む語調がとれないわけではないが、構えの見届けがまだまだ一方的といえる。それに対して五・六年生は、気分によって語調を整えることができる、即ち言いかえができるので、構えに柔軟さができているといえる。

さて次に(二)のイの報告文であるが、表2を見ると、正答がほとんど無い。しかも四年生以下では半数ほどが無答、五・六年生では20パーセントほどが無答である。文章が他に比べて長いこともあるが、それにしても、初めの「報告します」すら出てこないのは、どうしたことだろう。勿論「報告」という漢語の意味内容の理解ができなかった、またこのようなことばの調子によって言った経験がなかったことも挙げられるだろう。しかし表(二)のイで見るように(この表(二)のイでは、特に五・六年生でかなり多数の言いかえがあるのだが、ここでは省く)、各学年共、「一組」または「一組全員」まで言えたものが、5名から10名前後いる。またその他のものはそれ以上言えているので

あるから、「報告します」が全く頭に残らなかった、とは考えにくい。それでは、「ホウコクシマス」という音声まで何故消えてしまったのか。これは恐らく(二)のアの場合と同じように、特に四年生以下では、ことばを聞きつけた時に、イメージから先に復原しようとしたが、そのイメージが想起されなかったであろう。つまり、音声が消えたのでなく、イメージを伴った音声として入ってこなかったのである。しかし、まずイメージでなく、音の調子聞きとった子どもは、少なくとも「ホウコクシマス」は言えたであろう。しかし、これ以上に言えたとしても、「異常ありません」までである。問題はむしろ、そこまで音声で聞きつけることができても、それ以上に、報告内容を自分の音声で、また、自分の口調で聞かえたかどうか、である。それが多く伺えるようになるのは、(二)のアと同じように、五・六年生である。例えば、五年生では

。——ただちにひなん場所に向かってます。
。——ただちにひなん場所に集合します。
。——ただちにひなん場所へなんとかします。
これらの子どもは、最後の方でややあやふやになるが、内容を報告しようとする構えを自分の口調に合わせて、それこそ「なんとか」しようとしたのである。また、五年生の中に「一組全員無事であります」というのがあったが、ともかく自分の口調に合わせて報告内容を設定しようとしているのである。しかし、以上のような例は四年生以下では、ほとんど無く、五年生で10、六年生でその倍くらい出てくるだけである。従って五・六年生全体としては「報告」という構えは、何とかとれるが、報告内容が伴っていない、と言える。

次に三番目の「**相**」と「**操**」の関係である。
この関係からは、(三)のアでは、店員の口調と、自分の立場を店員の立場に転換しようとする構えとの対応がどうなされるか、(三)のイでは、五七五の語調と、「親心」という感情の撰取の構えとの対応がどうなされるか、を見ることとができる。

まず(三)のアでは、表2と表(三)のアを併せて見ると、一年生では、「お買い

ます。ただちにひなん場所へ発表します。一組全員無事です。ひなん場所に向かって出発します。報告します。一組は全員そろっています。ただちにひなん場所へ発表します。

。報告します。一組全員だいたいじょうぶです。ただちにひなん場所へ発表します。

。報告します。一組全員だいたいじょうぶです。ただちにひなん場所へ発表します。

になりますか」が、抜けたり言いかえ
ているのが多い。しかもその言いかえ
は、二年生以上では、「買いますか」
などのようになるのに対して、「買い
にいきますか」などとなってしまふ。

従って、一年生の半数以上が、この構
えをとることができないと言える。二
年生以上では、このような言いかえが
少なく、学年を追うごとに正答率が高
くなり、また言いかえの例を見て、

「立場の転換」という構えのとれてい
るものばかりなので、この構えは学年
を追うごとに発達し、特に五・六年生
では自由に構えを設定し、自分の口調
に合った言いかえもできることを示し
ている。しかし、「これなど」を「こ
れなら」に、「いかがでしょう」を
「どうでしょう」に変える子どもが、
各学年ほとんど共通していることは、
このようなやや改まった場合の口調の
訓練が、即ち、そのような構えをとる
という訓練が日頃の生活や学校教育の
場でなされていない、ということを示
していないだろうか。

次に(三)のイでは、表2と表(三)のイを
併せて見ると、五・六年生では正答も
しくはそれに近い答をしているのがほ
とんどだが、四年生では無答もしくは
ことばを抜かしているのが八割以上で
ある。四年生の誤答例を見ると、
「うちの動く」が出てこないのがか
なりいることがわかる。ということは
「寝ている」と「うちの動く」と

が結びつかなかったのであろう。考え
てみると、「寝ている」のは「自分」
であり、「うちの動くかす」のは「親」
である。そこには、自分と親という人
間相互の感情が作用していることを、
構えとして設定しなければならぬ。

また、この設問文は、五七五という省
略された文章であるから、その省略さ
れた部分を補って、論理的につじつま
を合わさなければならぬ、という思
考も働かなくてはならない。このよう
に考えると四年生では、人間相互の感
情撰取という精神作用と論理的なつじ
つまを合わせる思考とが統一されてお
らず、バラバラな状態にあると言える。
そして、五・六年生ではそれが、徐々
に近づいていく、ということになる。

次に、四番目の「連」と「様」の関
係である。

(四)のAとイは共に、しりとりに
言語操作性と、連想というイメージに
よる構えが、どう対応していくかを見
ることができるといえる。われわれの予想では
四のAの方が、ブルドック、クマ、マ
ムシ、シカの角というように、動物の
名前ばかり上げたのだから、四のイの
ように、互いに関係の無い名前を上げ
たものより結果は良いであろうとして
いたが、結果は逆になった。表2の四
A、四イを見ると、共に正答率が四年
生以下で低く、五・六年生で高い。こ
れは、(一)や(二)の結果と同じように、四

年生以下では音声よりイメージから先
に復原しようとするために、自分のイ
メージに合ったことばが残り、その他
は省かれるものと思われる。所が五・
六年生では、イメージより音声に(こ
の場合しりとりにという語調に)自分
の構えを合わせるができるようになる
と、言える。しかし表四のAとイ
で見ると、クマとマムシ、ことりとり
すといったしりとりの第二語、第三語
を抜かす子どもが各学年共ほぼ共通し
ているのは何故だろうか。これは、四
年生以下では恐らく前に述べた理由に
よると考えられ、五・六年生では思い
出そうとする際、「思考」などの要素
が入ってきてかえって思い出せなくな
り、音声を辿って思い出そうとする構
えも失ってしまつた子どもがいるので
はないかと考えさせられる。

さて四のAとイでは、どちらの方が
音声がかたどりに易いであろうか。表で見
る限り、イの方である。Aもイも、第
二語第三語の失われる率はほぼ同じで
あるから、字数やA行ウ行などの発音
域などは、ほとんど関係していない。
するとやはり、連想のしかたに連連す
ると考えられる。Aの方は、動物名ば
かりだから連想が混乱してしまうが、
イの方はその混乱が少ない、と考えら
れないだろうか。

次に、(四)の全くことば遊びのような
つまり、場面設定のしよりのない、い

わはイメージを持つことの手がかりの
ない場合の構えはどうなされるかを見
よう。表2を見ると、一年生が悪く、
六年生が割合良く、他はほとんど同じ
といった結果である。一年生では「い
るか」という音声のくり返しによる構
えが、まだ自由にならないのであろう。
しかし幼稚園児で、全て一音一音たど
って復唱した子どももいるので、そう
いった傾向のある子どもは、学年が上
がっても恐らく正答できる子どもであ
らう。しかし二年生以上で結果がほと
んど同じというのは、どうしたことだ
らう。このことは、ことばの遊びとい
うのは、音声の面白さを伴っていないが
ら、なおそれは人間の成長とは余り関
わりがないことを示している。それは
表(四)のAで、「イルカいるか」を「イ
ルカいないか」にしている者が、各学
年共ほとんど同数ぐらいつづいていること
からしても明らかである。

次に、(六)の「考」のみの場合である。

(六)のAの場合は、相手にナンセンス
な、しかも馬鹿にしたようなことばを
投げかける際、ことばを論理的にどう
並べるかという構えを見ようとし、(六)
のイの場合は、三段論法という思考の
構えのしかたを見ようとするのである。
表2で見ると、(六)のAの結果は、三
学年同じである。このテスト中、ニコ
ッとする子どもが多かったのは、ナン
センスな、馬鹿にしたようなことばの

投げかけの面白さが、わかっていたのであろう。また、テスト後に設問文の中で最も思い出すのは、この文であったということは、イメージが最も設定し易いということである。また、この(六)のアの文は、論理的には二段構えである。結果から見ると、この二段構えの論理性は、早くから習得されていて、しかもそれが三年生までほとんど変わらない、ということになる。

さて次に、(六)のイの場合、これも三学年余り結果に差が無い。しかし正答も無答も少ないということ、言いかえが多いということである。所でその言いかえの例を見ると、「カラスは黒い、黒いからといって八郎君はカラスではない」といった二段論法になる者は少なく、むしろ、「黒いからといって」を、「だからといって」「だからといって」といったように、三段論法の構えをくすすずに言いかえている者の方が多い。従って、この場合、イメージが設定しやすいということもあるが、三段論法の構えも早くから習得されていて、しかもそれが六年生まではほとんど変わらない、ということになる。

次に(七)の「構」と「様」の関係である。

(七)のAの場合、「ある…:です」や「…:若者がありました」といった物語の中に使われる語調と、風景とい

う自然描写の中に人間を配置しようとする物語の構想性にどう対応するかを見ようとするのである。表2の結果を見ると正答が全くなく、四年生で80パーセント、五・六年生で50パーセントの無答率である。この結果の考察は、(二)のイの場合と重複する部分は省略することとし、ここでは前に述べた観点について考察したい。

言いかえの例を見ると、「ある…:です」といった物語の語調は、よく把握られていると言えるが、「…:がありました」は、ほとんど「いきました」になってしまい、「ありました」調には不慣れであることを示している。また、物語の構想性については、言いかえて、最後までまとめた者は、五年生で六例、六年生で五例あるだけである。五年生では、

- ある春の日暮れです。唐の宮の下でぼんやり本を読んでいる若者がいました。
- ある晴れた日のことです。唐の都の門の所に、しょんぼりとした男がすわっていました。
- ある日のことです。西の門でぼんやりと立っている人が、空をあおぎつつ、見ていました。
- ある春、中国の洛陽の門に、旅人がブラブラしていました。
- 昔のことです。ある唐の若い男が歩いていました。
- ある春の日に、洛陽の門の下で、空

を見る若者がいました。
六年生では

- ある唐の都に、ぼんやり空をあおいでいる一人の若者がありました。
- ある春の日の都、牛をつれた一人の若者がいました。
- ある昼、洛陽を歩く若者が一人いました。

○昔々唐の国に、ある晴れた空を見上げるひとりの若者がいました。
○ある春、夜の晩、なんとかの門の下に、なんとかいます。

このようなことから、やや長い物語の構想性という構えは、まだ少しの子どもにしか発達していないということが言える。またこのことは、自然の描写の中に人間を設定してみるとい構え、或いは世界のとり方がとれていない、ということでもある。現代は、人間関係の中でばかり人間関係のあり方を考えさせようとするが、ここで得られた結果の自然と人間という巨視的世界観を持ちにくくさせているのだというだけでなければ幸いである。また文学教育ということも、ここにあらわれたような構想性ですらとりにくいというようなことでは、現代の子の文学性も案外低俗なところで低迷しているといわねばならない。

(東京・玉川学園小・教諭)

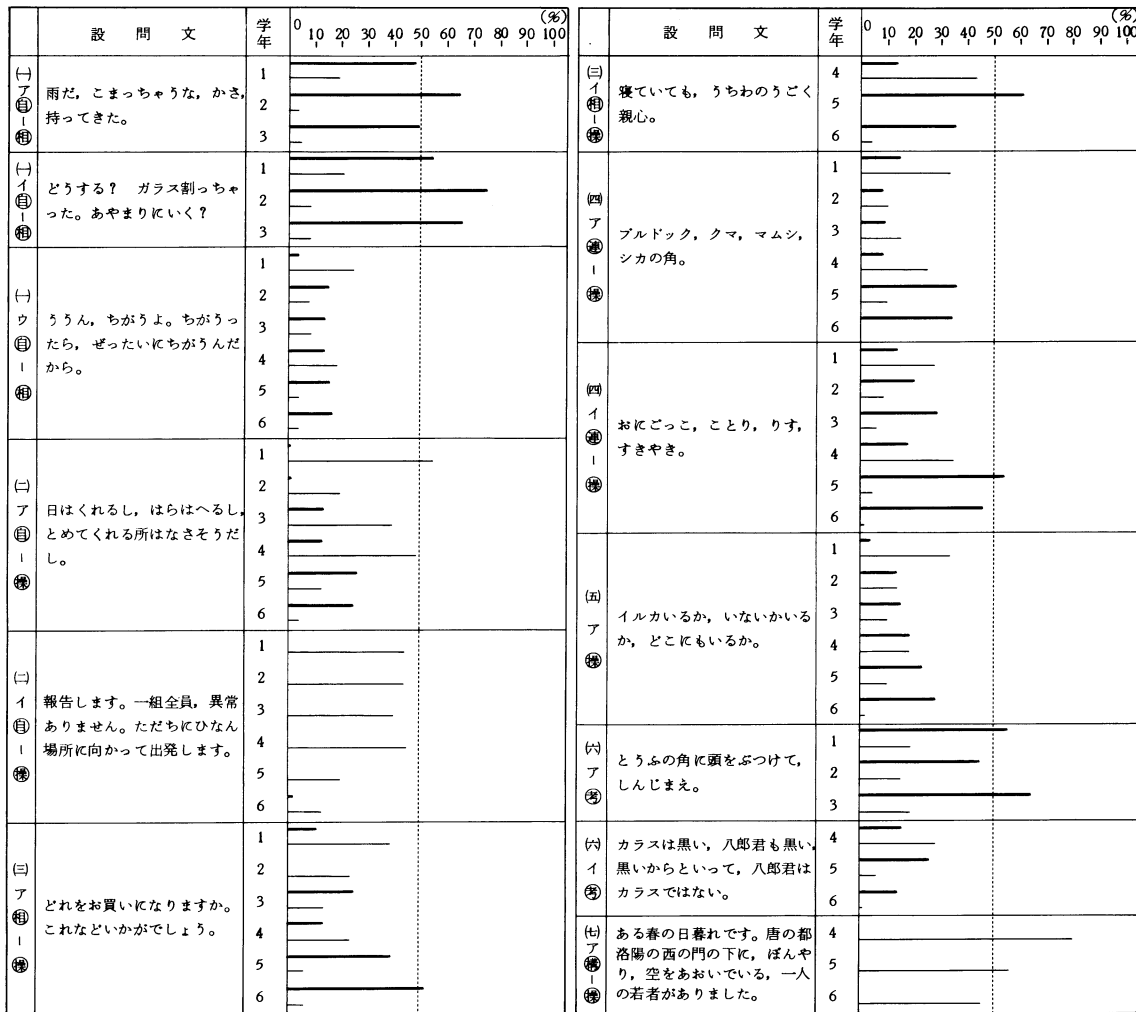
表1 学年別正答率無答率表

設問文	正答率(%)						無答率(%)					
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6
(七)ア 雨だ、こまっちゃうな、かさ、持ってきた?	47	65	49				19	3	4			
(七)イ どうする? ガラス割っちゃった。あやまりに行く?	55	75	66				21	8	8			
(七)ウ うん、ちがうよ、ちがうたらざったいにちがうんだから。	4	15	13	13	15	17	25	8	9	18	4	4
(七)ア 日はくれるし、はらはへるし、とめてくれる所はなさそうだし。	1	2	14	13	27	25	55	20	39	48	13	4
(七)イ 報告します。一組全員、異常ありません。ただちにひなん場所に向かって出発します。	0	0	0	0	0	2	43	43	40	45	20	13
(七)ア どれをお買いになりますか? これなどいかがでしょう。	11	0	25	13	39	51	39	23	13	23	6	6
(七)イ 寝ている うちわのごく 親心				13	61	36				43	0	4
(四)ア ブルドック、クマ、マムシ、シカの角。	15	8	9	8	37	34	33	10	15	25	10	0
(四)イ おにごっこ、ことり、りす、すきやき。	13	20	29	18	54	47	28	8	6	35	4	2
(四)ア イルか いるか、いないいるか、どこにもいるか。	3	13	15	18	22	28	31	13	10	18	10	2
(四)ア とうふの角に頭をぶつけて、しんじまえ。	56	45	63				19	15	19			
(四)イ カラスは黒い、八郎君も黒い、黒いからといって八郎君はカラスではない。				15	26	13				28	6	2
(四)ア ある春の日暮れです。唐の都洛陽の西の門の下にぼんやり空をあおいでいる一人の若者がありました。				0	0	0				80	56	45

表 2

学年別正・無答率グラフ

正答率 無答率



(注・棒グラフのない学年は無答)

設問文別・誤答・言いかえ例 (表の見方… 右の列から左の列へ)

設問文	誤答	言いかえ	設問文	誤答	言いかえ
(一)ア ① ② ③ 雨だ、かき持ってきた？ (3) 雨だ、こまったなあ 雨だ、こまっちゃうな、かき、持ってきたかなあ	—○ (5) —こまるな —こまっちゃった —こまっちゃったな (2)	—○ (3)	雨だ、こまっちゃうな、かき、持ってきた？ (一)ア	—たいへんだこまるな —こまっちゃう— —こまっちゃった— —こまった— —○— (4)	—○ (4) —○ 持ってきたかな
どうする？ ガラス割っちゃった、あやまりに行く？ (一)イ	—○ (2) —○—	—○ (4) —あやまりに行こうか	こまっちゃうな	—持ってきたかな？	
○どうしようか、ガラス割っちゃった、行く？ ○どうしよう、ガラス割っちゃった、あやまりに行こう。 ○ガラス割っちゃった、どうする、あやまりに行く？			こまっちゃうな		
			○雨だ、かき持ってきた？ こまっちゃうな		

[注] ○—○該当のことばの前までできている。○—○— 該当のことばを抜き、前後はできている。○()内は人数。()の無い所は、1人である。
○—こまった— こまっちゃうな、をこまったに言い変えている。その前後の文は合っている。

		<ul style="list-style-type: none"> —〇— (0) —ちがうよ— (10) —ちがう— (5) —ちがうんだっら—(2) 	<ul style="list-style-type: none"> —ちがうんだよ(3) —ちがうったら(5) —ちがうんだから(6) 	6年	割っちゃった	<ul style="list-style-type: none"> —また— —やっちゃった— 		2年	
日はくれるし	はらはへるし	とめてくれる所は	なきさうだし	(二)ア	ああ、こまっちゃった。 どうした (2)	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) —また割っちゃった —〇— 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (5) —あやまりに行こう 	3年	
<ul style="list-style-type: none"> 〇日があるし、おなかはへるし、とめてくれる所はどこにもないし 〇日があるし、おなかへったし、とめてくれる所もないし 〇日もくれるし、はらはへるし、とめてくれた 〇はらはへるし、おなかすいたし、とまる所はない 〇おなかはへるし、とまる所はないし、どうしようかな 〇イルカいるか、とめる所いるか 〇雨はあるし、はらはへるし、とめてくれる人はいない 〇はらはへるし、とめてくれる所はないさうだし 〇日ははずむし、はらはへるし、とめてくれる所はないんだから 				1年	〇ガラス割っちゃった、どうする？				
					ううん	ちがうよ	ちがうったら	ぜったいにちがうんだから	(一)ア
夜になるし	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (5) —おなかもすくし 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 —とめてくれる所も—(3) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) —ないし(3) 	2年	<ul style="list-style-type: none"> —ちがうから —ちがうったら、ぜったいにちがうんだっら —ちがうたら、 —ぜったいにちがう —ちがうたら、 —ちがうよ —ちがうんだから— 	<ul style="list-style-type: none"> —〇— (2) —〇 —ちがうよ—(4) —ほんとうにちがうよ 	<ul style="list-style-type: none"> —ぜったいにちがうよ(2) —ぜったいにちがうっていうんだ —これはちがう —ちがうたら —ちがうから 	1年	
					〇ちがうよ、ぜったいにちがうんだから	〇ダメダメ ちがうよ	〇ぜったいちがうよ、ぜったいちがうたら、ちがうんだから		
	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (5) —はらはへったし 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 —ないし(8) 	3年		<ul style="list-style-type: none"> —〇— (4) —ちがうよ—(1) —ちがうから—(2) 	—ちがうよ	2年	
					〇日はくれるし、はらはへるし、とめてくれる所はなきさうだし				
	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) —はらはすくし(3) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) —ないし(2) 	4年	ううん、ううん	<ul style="list-style-type: none"> —〇— (1) —〇 (4) —ちがうっていったら —ちがうよったら(2) —ちがうんだから(6) —ちがうんだよ —ちがうから 		3年	
日がくれるし	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (5) —(4) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (4) —とめてくれる所も(6) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 —ないし(2) —ない(2) 	5年	<ul style="list-style-type: none"> —ちがいます— —ちがう— 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (2) —〇— (2) 		4年	
<ul style="list-style-type: none"> 〇日があるし、はらはへるし、どこもとめてくれる所はなきさうだし 〇はらはへるし、日はくれるし、とめてくれる所はなきさうだし 〇はらはへるし、日はくれるし、とめてくれる所はないだろうし 〇日があるし、とめてくれる所もないし 〇日はくれるし、はらはへるし、どこかとめてくれる所はないか 〇日はくれるし、はらはへるし、どこにもとめてくれる所はなきさうだし 〇日はくれるし、はらはへるし、どこにもとめてくれる所もなきさうだし 〇日はくれるし、はらはへるし、とめてくれそうな所はないし 〇日はくれるし、はらはへるし、とめてくれそうな所もなきさうだし 									
	<ul style="list-style-type: none"> —〇 (3) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 —どこか、とめてくれる所は (2) —ととも、とめてくれる所は —どこにも、とめてくれる所は (2) 	<ul style="list-style-type: none"> —〇 	6年		<ul style="list-style-type: none"> —〇— (1) —ちがうよ— (15) 	—ちがうんだよ(3)	5年	
<ul style="list-style-type: none"> 〇日はくれるし、はらはへるし、どこかとめてくれる所はなきさうだし 〇日はくれるし、はらはへるし、とともとめてくれる所はないし 〇日はくれるし、はらはへるし、とめてくれる所は、ありそうもないし 					<ul style="list-style-type: none"> 〇ううん、ちがうたら、ぜったいちがうんだから 〇ううん、ちがうたら、ちがうたら、ぜったいちがうんだから 				

おにごっこ	ことり	りす	すきやき	(四)イ					
○おにごっこ, りす…(9) ○おにごっこ, すきやき…(2)	—○—(11) —○—(7)	—○—(4) —○		1 年		—○(6) —うちわが—(5) —うちわを—(2) —うちわに— —いつでも—		—○	6 年
	—○(2) —○—(8)	—○(5)			ブルドック	クマ	マムシ	シカの角	
				2 年		—○(8) —○—(3)	—○(5)	—○	1 年
	—○(10) —○—(10)	—○(3)	—○			—○(8)	—○(4)	—○	
	—○(4) —りす, ことり	—○(2)		3 年	○ブルドック, シカの角 (4)				2 年
						—○(2)	—○(6)	—○(4) —シカ(3)	
	—○ —りす, とり, すきやき(2) —りす, すきやき(6) —りす(7)	—○(4)		4 年		—○(4)	—○(5) —ヘビの皮	—○(2)	4 年
	—○(2) —とり, すきやき	—すきやき, りす				—○(4) —○—(3)	—○(6) —○—(10)	—○	
イルカ	いるか	いないか	いるか	どこにもいるか	(五)ア				
	—いないか(8) —いないか, どこにいるか(3) —いないか, どこにもいるか(4) —いないか, いないかいるか(2) —いないか, いるか, いるか, どこにもいるか —いないかいるか, いないかいるか, いないか, どこにいるか	—○(3) —○—(4)	—どこにもいるか(5) —○(7)	1 年		—○(5) —○—(4)	—○(3) —○—(10)	—○	6 年

との こおり	—○(3) —あたまに—	—○		3 年	○(2) —○(2) —いないか—(1)	—いるかないか(2) —○(9)		2 年		
カラスは黒い	八郎君も黒い —○(5) —黒いからと いって八郎 君は—	黒いからといって —だからと いって—	八郎君はカラスではない	4 年	—○(4) —いないか—(5)	—○(10) イルカいるか(4)	—○(2)	3 年		
	—○ —黒いからと いって八郎 君は— —八郎君は 黒い—(6)	—○ —だからと いっても—(3) —だから —黒いと いっても—(3)	—○ —八郎君もカラスでは ない(8) —八郎君は黒くないと いうことではない —カラスではない(8)	5 年	イルカは (5)	—いないか—(4) —○(3)	—○(2)	4 年		
	<ul style="list-style-type: none"> ○カラスは黒い、八郎君は黒くない、カラスは黒いといって、八郎君は黒くない ○カラスは黒い、八郎君は黒い、八郎君は黒いといっても、カラスと同じではない ○カラスは黒い、八郎君は黒い、黒いといって、八郎君はカラスではない ○カラスは黒い、八郎君は黒い、黒いからといって、カラスではない ○カラスは黒い、八郎君も黒い、八郎君も黒いからといって、カラスではない ○カラスは黒い、八郎君も黒い、黒いといって、カラスの間ではない 									
カラスも—(9)	—○(3) —八郎君は 黒い—(5) —黒いは 八郎君(2)	—○(4) —だからといって —(2) —黒いといって—	—○(2) —八郎君もカラスでは ない(2) —カラスのわけでは ない	6 年	—いないか—(1) —いないか どこにもいるか(3)	—○(2) —どこにいますか(8)	—どこにいますか(1)	5 年		
	<ul style="list-style-type: none"> ○カラスは黒い、八郎君も黒い、黒いといってもカラスではない ○カラスは黒い、八郎君も黒い、黒いからといって、八郎君はカラスじゃない ○カラスは黒い、八郎君も黒い、でも八郎君は黒いからといって、カラスではない 									
ある	春の	日暮れです	唐の都、洛陽の西の門の下に	一人の若者が ありました	(七)ア		—○(3)	—○(5) —どこにいますか(9)	4 年	
	—○(5)		—京 —西			—いないか—(5)			6 年	
	—○(7)									
	<ul style="list-style-type: none"> ○ある春の都、ぼんやり ○あるとうの下 ○あるとうの、ありました ○ある春の日、ぼんやりと ○昔々、唐の都 ○ある春の都です ○ある京の都 	<ul style="list-style-type: none"> ○ある春の都です、唐の家の下でぼんやり本を読んでいる若者がいました ○ある西にある、らくようそうという ○ある京の都、ぼんやり空を見ながら ○ある晴れた日のこと、唐の都の門の所に、しゃんぼりとした男がすわっていました ○あるのこと、西の門の所でぼんやりと立っている人が、空をおおぎつ見していました ○ある春、中国の洛陽の門に旅人がブラブラしていました ○昔々のことです、ある唐の若い男が歩いていました ○ある春の日に、洛陽の門の下で空を見る若者がいました ○洛陽の都の下に、ぼんやりと ○ある春の夕ぐれです、ひとりの若者が 				<ul style="list-style-type: none"> ○イルカいるか、どこにいますか ○イルカいるか、どこにもいるか、いないか ○イルカいるか、どこにいますか、どこにもいないか ○イルカいるか、いるか、いないか(2) ○イルカいるか、いないか 			5 年	
						とうふの	角に	頭をぶつけて	しんじま	(六)ア
						—あたまに—(2) —よこに— —とこに—	—○—(2) —いしを—	—しんじま		
										1 年
	—○(3)									
	<ul style="list-style-type: none"> ○ある春の日の話です ○ある春の日 ○あるはれた ○あるはれた、唐の都 ○あるぼんやり ○ある唐の ○ある唐の都 	<ul style="list-style-type: none"> ○ある都です、唐の下にぼんやり ○ある昼、洛陽を歩く若者が一人いました ○ある唐の都に、ぼんやり空をおおいでいる一人の若者がいました ○ある春の日の都、牛をつれた、一人の若者がいました ○ある昔、洛陽という門の下に ○昔々唐の国に、あるはれた空を見上げるひとりの若者がいました ○ある春夜の晩、なんとかの門の下に、なんとかいます ○ある春の日、西の門で若い人が空をながめていました ○ある春の日、長安の都で若者が ○ある春の日に、ぼんやりとした都の 				<ul style="list-style-type: none"> ○ボール、とおくぞう、こおり 	—○ —ぶつかって—(2)	—しんじま	2 年	
						○とおくの方に石投げて				